

新たなリーダビリティ測定法 - 試案 -

A New Objective Readability Yardstick

摂南大学 田中健二

キーワード: リーダビリティ、Flesch Reading Ease、英文難易度、英文相対評価

はじめに

英文読みやすさ、読みにくさの研究をめぐっては、1940年代からFleshやKincaid等の人達によって画期的な試みがなされ、それが米国ジャーナリズムや政府刊行物の文章基準に適用されたこともある。また現代でもこれらのリーダビリティ測定法が、英文難易度を数値化して行われるところから広く利用されている。しかしながらRudolf Fleschの難易度測定法には段階評価数値が得られるので非常に理解しやすい面があるものの、その数値を導き出すのに係数を含む公式を使うという無理な面もあり、日本の大学英語教育にそのまま全面的に利用して良いものか、本研究では疑問を提起したい。

Fleshが最初に発表した難易度測定公式の中身として、(1) 1文の語数、(2) 接辞の個数、(3) 人物への言及回数、などの要素が盛り込まれて係数を使用し、0から7までの段階数値を提示する。つぎにflesch改訂版として、(4) 音節数(syllables)の要素を加味し、0から100までの数値に変換する難易度測定法にしてある。そもそも1文の語数とか、接辞の個数とか同列で比較できない各要素を、一つの数値の中に取り込むこと自体かなり無理があると思えるので、読みやすさの基準を単一の数字に変換せず、他の方法でリーダビリティを観察することは出来ないか。さらにFleschの要素の中で、人称代名詞を含む人物への言及は、それが読み手にとっては読みやすさにもなるし、読みにくさにもなりうる点で、基準に取り上げにくい。また音節数を難易度の基準要素にしている点は、単純に音節数が少ないほど読みやすいと画一的に処理は出来ないのではないと思われる。

田中式リーダビリティ測定法

以上の理由により本研究ではまったく別の角度からのリーダビリティ測定法を試みる。そして大学英語教育に携わる者の研究として、日本の平均的大学生の学習歴や日本の英語教育を視野に入れた方法を採用すべきであるとも考える。そこで対象英文を語彙測定の面と文法測定の面に大きく分けてコンピューター処理を行ない、そのデータをもとにレーダーチャートの上で各言語材料を相対的に又視覚的に捉える。つまりある英文の読みやすさは10段階の6だとか5だとか、具体的数字によらず、他の言語材料と比較してどの要素の難易度が高いか、どの要素で差がほとんど見られないか、等相対的な比較を主体にする。具体的にはつぎの各項目(Item)を本研究で対象とした。

Item 1. 基本語外の語彙(特有語彙)

日本のほとんどの大学生は日本の中学、高校英語教育を受けて入学しているので、この日本の中等教育語彙レベルを中心に把握してある基本語彙集として『JACET 基本単語4000』

9月23日(月) 研究発表第2室(1200)

を取り上げた。ある英文にJACET4000 がどれだけ含まれ、またどれだけの語彙が基本語以外かを網羅的に検索する。そして英文テキストに含まれる基本語外の単語(すべて原形に修正し統合した形)を読みにくさの要素としてItem 1の基礎にする。

Item 2. イディオムの出現数

英語学習者にとって未知イディオムは未知語と同様の困難をもたらす。イディオム構成語のすべてが認識できても、イディオムとして1ユニット単位で見ると意味理解できない場合があるから、イディオムの種類と分量を読みにくさの要素の一つにする。

Item 3. 文章の長さ

1文に含まれる語数である。一般的に意味完結する単位は1センテンスであるから、英文難易度測定において、文章の長さ測定は伝統的であり、自然であり、必須であると考えられる。1文章とはピリオドかクエスチョンマークあるいはエクスクラメーションマークで完結し、その後に2スペースを置くものと定義する。すなわちコロンのセミコロンで一旦区切り、1スペースのあと具体例など長い文が続くものは、文の区切りとは見なさない。

Item 4. 分詞構文

Walking along the stream, Tom saw Mary. にあるように、文頭に分詞を置くと副詞節の主語が何であるか探すプロセスが生じる。このように文の中に省略があると読みにくさの要因になると思われるので、その頻度を取り上げる。したがって意味上の主語が異なる時分詞の前にその主語を置く、いわゆる独立分詞構文はここではカウントしない。

Item 5. 関係詞

関係代名詞と関係副詞が出てくると、その関係詞の相当語を確かめつつ読むことも生じる。単に文字に従って読み進めるほかに裏作業とも言うべきプロセスが介入する。特に非制限用法にはその必要が大きい場合がある。そこで関係詞も読みにくさの要素に入れてみる。

上記のとおり読みやすさに関し、対象とする英文を絶対的な数値に置き換えず、各英文の比較を中心に相対的判断を目指す。これにより単一の英文の読みやすさの数値は出ないものの、ある英文はどの要素において他の英文より読みやすいか、あるいは読みにくいかが予測しやすくなると考えられる。

対象英文

高校英語として英語教科書本文(I、II、IIB)

大学入試センターテスト

英語検定試験2級、準1級テスト問題

時事的な英文としてThe Japan Times